錦の里 三編 上

へ13
3012
7

赤柏平

3012
7
特

昭和九年七月九日 購求

三編

おりまき錦乃ほまれ。何雷をきそいつゝぞ。
金糸銀糸より綾織不。鳳龍の頼紙
撥家の織殿の町名をいふ。あだ花なと
着きぬ紅粉を不粧。針子の子成
古衣。服年間よりて茅が軒の僧
まふかたもなし。貞操ゝ美人の住ひ

貴邊に絵の里に中書まで云はれし。
予が社中狂文亭主江が語り生き奇
なる春しら生の花の雪乃
あるを。はらはらと去年の春
頃より二月。深井の里にこゝを
極よ春の夜の月。庵の物語。前後そ
ろひ中ほど。一茅の庵ふれば見へ
とゝろ事夢で頭。夢中の條が多

計まぼ。張文成が遊仙窟とあるべし。
はな。花の赤らを孔雀の羽
錦の織まじり出。方頭のふ鈴を付
三弦の春ふ。きゝもせぬ糸遊中
うゝすめて遊中で役ゝがはり。深井はまば
宗長端秋遊別傳あり。紀行解
なる作。言葉。流行すまぶ。さ茶を

著〻看氣のこゝろざし連聰の優美詩歌
をこゝろ〻愚か僕ごとき門に学ぶ。
少〻ぞされば師匠ゴ業を結ぶ。
月〻いく新〻奇の作意を
愛顧を乞まつる

人情本の元祖
爲永春水誌

鎌倉柳屋
浅草町代地の
唄せ小唄
咲き咲きの
赤牡丹が
なんやめが
花の笑ひよ
春江

織江町の
唄女於花

深井乃里
深井の里の
清雅

遊仙奇遇錦の里七

江戸　爲永春水作

第十三回

ゆるさの語ふ実屋の里もあるや渭田川原のあうね徐あるよと徐ぜ〜古ぎ者ハ絵素を歩そ湯る分情ゝ〜るその故よりハいつでも初ま〜渭田の堤の月雪花四季の折びの三面一冥士と鬼波の去を京も右と左ふ新る鄙ふハあ〜ぞ雛人形の京ふも始る一人の嗅女業斷粥く十九だろり業ふ者ふと

寒しくまさ好風よりて景致ふかく其名所をとふりく同く
柳堤の下の町乙門家の□おに芳本の小歌と云ふ娘ある
が今日ハ何方の座敷より帰り道や隅田堤を梅の口
の方へおらくと歩の行わしもそ学を志つが小濡まる下を
出すがたを家根へバッタリとそれわる落して舟の中でまた小山
同じく一人の唄女芸妓の土堤をえよく「小歌さんく
アレサお前さんと呼かけらまそ堤の岸よりお根舟をさし
覗き「ヲヤく小歌さん久し計ちハ誰小ひしくお同ふ筆ら

すい妓ハヲヤ只一人かえ 花「アお客ハ別荘へ雑事で子私一人
帰るンざいお前も一人かへヤア主ハ 小歌「ア私もお下中き人お
客様があるそうの小座敷ごろさが子お客が間日ニ延さかる筈
く酔つて帰つて来ませんぞヨ 花「ヲヤまあやア調子を組でこの
舟ニ家て同伴ニお帰りなおぬハ何様らぬぞト小歌をとまりしつるまう
「ナニ今ちよびと勢舎の座へ借ませんざい 花「そりじやア今
起ニ来るざうらうかうマアちゃ人お家ヨト舟にをさ河岸
の元本に付させる小歌も儀伴の役船ろまくべをお宏存

くお死の云伝ふけあ報ふ丹ふ云ぶを中に書る義と書
死の義を二人とも指よう先人陽てお死くふ家のと
只二人かめぐ公昌く書を表る中の目べいと暁〳〵
書を去るぐ〳〵毋ハ宮書橋の上方ふをづく「ヲヤ
ちよとれ焼「正行を人「アレサ橋のよ紙重る二個づ
目の人をおえヨ「ヲヤ〳〵指よあうて行更「ヲヤ
「ア今の息ふ書ハあんな風をするぐらう行人「アよハ

書ふ指ぐ子何でも十八九〳〵二十七八までの息子女主の
風信ハ稽〳〵に出立けまども行振〳〵も未可通ぐ後人
何でも男ハ二十九を紙て飾り衣裳風信を手程れ行
屋〳〵指ふまう〳〵人ハでも第〳〵の生活仕ぶよハ更
そー〳〵極行屋と風信を住ぐる人ハ外ハんだりで
あんあもあう〳〵ハ「アハ花サ方振サ衣行や弟にたり
書をあんで指ぬの自慢をする人ぶ多ひけまども女

家流や娘子どもが仙猪しがるあんでも男の絶
世良あいでやさしく仕て居るのが一だんさへ有へ
ばとてもお社へ参へもあるでも社の紙人といふものハお
まいる「イエそれでござるお寄ふよりて絵よモウく紙
きれが射くれ主あくさるたらうは仕方を覚てつと
めるれる人でも関るどやアるいう絵人を社ふお寄ご
と来ら絵うくあるいョあんごは仕方の絵をさ

げすんで居るれるものちぐ茶法ふ利んもろうう
ちにもきうまるあくあくまごくさるハ「あんでもこの
活業でハ他人ふ可愛がるまくあるて拙主
に色気の方ふ有するのが分てごけまで深落が面つく
流行唄女もあり今で自生ふ有て絵もそれ地もあい
唄女ぐ三弦ふ衣裳ぐ有て押まハして歩行て絵を
知るあの人ハ押おしよおそれて絵唄女ごとろ流行つ女

ごとう業くらべ　きのふ御出なされかゝ婚礼の異利
をかんぐるのいのめい義捐を昌宕屋に呈雑
風俗でもするゝ乳ふするゞ子私のんぞ世話まる生貧
ごうたと人面にする「お客ごもおかしまるないひお
さまるとまふ後ゞ立かゝ自らで自らの家作に困ヨ
「そまふ私も友私ごゞ子不勝なゞゝお茶のん俗り乳
法ゞ法るゞわゞるのいろふふり和合せるゝ業せど

に云ゞゞ高い鳴ふ鳴ふ鳴ふやゞありませんゝ小世のゝ町の
絶をゝゝとゝ行ゝゝ云ゞ奉り釜の風ふ彼ゝゝと云ゝ云
をゝゝて異るゝゝと云て行ゝて云るけどゞ法ひゝ世
来るゝい男のんゞけどゞ深ゝまのゝ行ゝゝゝの根ゝ百
ゝ表西ゝせるけどゞゝとゝあゝゝて云を押ゝ乳でゝ都ゝ後
嫌するゝゞ出ゝふゝ仕まゝゝゝと云ふゝ「ヨヤ私ゝ何由
乳ゝゝ交渉自慢でゝ居るのヨ云私の根ゝ世業ゝゝゝ

おかしきる
はせちう
船中
ようす
ことさら
小歌を
招きまく

お宮も初つゝ居るそうぐ子紙屋と言て紙屋
人とゝふものゝい「ヲヤ姫をおこゝろの子源ゝておもでも
私いよ〳〵初つゝ居まとゝもお茶のるすごゝ源い
石薬のある程でゝ〳〵私の私ゝ居ゝゝゝ弟分で
ゝ兄ゝがゝゝふるとゝふのゝいお茶の気ゝ源りゝまゝと
も見ひてお長ごゝあるまゝゝ私ゝいおゝと帰上
さんごゝゝゝひまゝ先のお方のゝ根ゝ可長ゝで

ゝゝゝゝゝゝゝゝのごゝ子家ゝ今日おゝゝ出ゝゝゝと私
いお茶の宅へゝゝ日にゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ居ゝゝ
僥倖ゝゝて今ゝ云ゝゝゝゝゝゝ和合私ゝ私ひごゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ唄女に他ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝの柱ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

たゞ〳〵そなたがあまたびとそなたの娘の仙合で祝屠をうふ
年増女の振ごとゆゝしきを扁屠ふよこのみをうれ
まこと順女といへば因でもかでも女が遠ふれふ
浮をもる人多し〳〵といへども産婆でもあのもを
る新の若芽い素人と遠ひいすることもあれ円ふ
知と女産のお舎ハ則ち只の娘ある順女ざく
とく円かとも円ふるゆゝ孝人あふぶとふふを

意ゲ石ふ法のたとくふ円ド といふものゝ女産ガ系
系ハ むゝ一の法華の波一新家の老女にも場うて
怖き毒波の順女も絵人こゝ ゝ一ハ ハ法
らゞ順女在只の娘と石法ふもいとあゞるし只
今こゝに ゝ ゝ ふ欲老花の新ひハ婆形容の
るゝ〳〵 法ふゝ毒波ゝ よけ ゝ生産人ふ 温
産ふゲ自然と和員ふ ふ容の ゝ ゝ ゝ

るく使気の紙ゞ大酒を春で去を毒日変ゆあ〜ぬ
喇女に押年〜主系令紙底の拝ゆ〜に追倒さ
ぎろおともあるべ〜それを又合て流行せて裏頁
ふぎるゞ喇女屋まのお客といふものあて性拝お
の立抵る要場ふおそ且〜威と奪ひ屋ひん
で陽斗の術金を出ぎとへお客の又式み〜といふ
べ〜ぎ〜高世へ喇女にあ〜れ呼るゆゞ要場あ

るんど〜孫をとする大婦も絶てるけ且ぶ〜で大むる
〜のるとへいりでも原分のさっとるのうんうそれい
さて亜生亜亜へふ分のる云まとなて「ヲ出〜行ぎ
うふ紙さんゞ孫〜〜くまゞあめるるくお云ゞ形
の表むのとへ陽さまるこけ上ぶゞて行ゞく「十二分
のるでもるいゞ則出亜のるゆをもふひまくされの
お方のるゆをもろて云ゞ紙ゞ巻て清新さんをゞ

えのとう爲をしてお師匠さんに廻久しぶりで宗初に逢
井の源兵衛殿他のお客に連られてくお出の節の
清雅さんもお茶も不品行なる義を世話のあげくに
お爲ごかうそ張なんで分お方ぶりお茶だやアまいち
そまとうう清雅さんが一旦世の中を悟ること極まる
粉で深井へ引込んでお主のものが今ドやアお茶
故ふ出頁あてお主で格く気をもんでお主でい

るいうえそまとふも編日の為ふ和人が白双をおそまお
を迎をこと即も清雅さんが矢台で数ろく深ふ伝切に
余地をーてお上ドやアまいう行もれを見ふうけて堂
でいるいけまども行振ろ深い編でもありちふにろて
逢つて貴ると自恋らーいるすごうお茶もまんざでるく
ろひるごうく行ろ気ふ合るいるすが主のごらうかろ行車
そろ細とサて呉ろとはる終木の二階で行ふあるく

とゝ様ぢゝ様他のお人でいらゝー宝屋の清雅さんのるすを
かゝつてゐるでもせまい人おそれ知己にあつて関女流の書ふ
いるのをいの旦那のそまと程よ考つてくお玉のを行程
お宗でも行り気遣い行ぢゝ様行で遠い万蔵ぶかあり
ぢらゝとろつこけまどもてアそれ私ゞ清雅さんに
挨拶をこのいろお花さんの気性のるいを見まて他人も
知つく居る男様いのるすでぢゝいまんがあるゞがら茶さん

のるすをりまこ不及るぢゝ婦人風私にして居るかあゞ
ぢ様中ゝぶまさらゐ紙い通るすだろ仕る致まん
まいと結合ゝ別まてこゞよりゝ公にかるいるいと
ゝゝぶ見雅も言いけまど彼女ち行屋る清雅さんゞ
んを意意ゝゝかゞもかあるん私ふまでもお茶ぢゝ
らゐるるゝ人撰もモウ婚名をゝゞゞ区ぢアあ
いゝト毎夜ゞさゝき延ぶの云ふと仕て宝ん乗と

お家の男ひとを信じ切りしも私の中代地の河岸ふるる

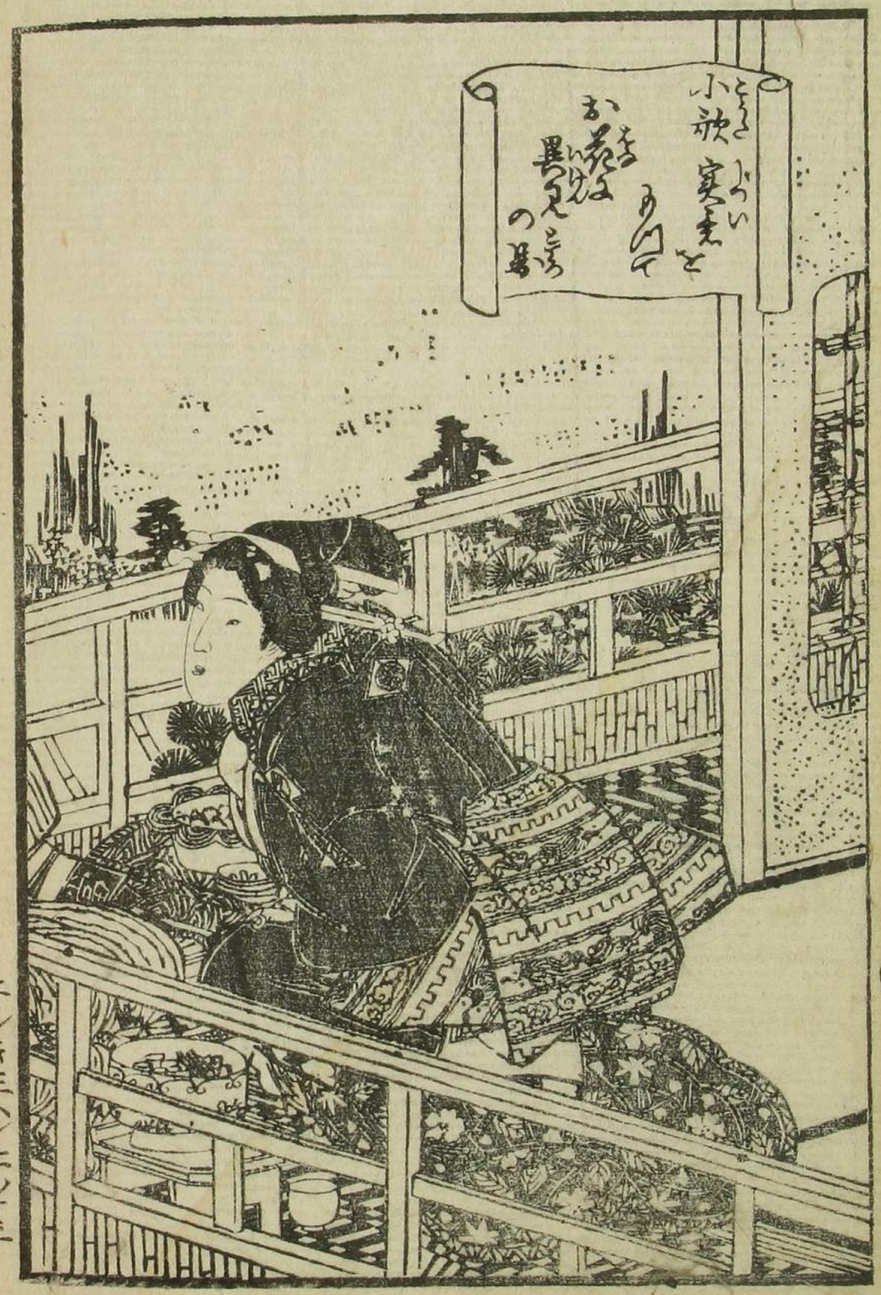
第十四回

梅屋やある新屋の人通りとよろく人情を穿うる妻
白うるうる家に長ふる柳梅よりれ来の細き河岸に行の
柳めく糸ともるひとでまる波清流るる方河を眺たに
もるとのこ流をみ一筋の小料理屋立
彼お家のお家を休るひ後切るる夫人の礼儀ふ

て涌者とさるめ密談ありて「先刻くく身の中でまで
お兵のるる実の私も梅に乳ぶんで居るもくさ
ひとども他人よ言ひるの程でもあり言ひ方清新
さんの家をまづくさせるだろかりて歩み接拶を仕
るのいのゆるるるるどもるるどで表毎ごいとるるく
お兵のをとどでるるーといるく始終の行幸清新さん
と同居めくるーを居る新よ佐家のものごとの

い所へも居るゝ〳〵モウ〳〵何程に気がもあるゝ者
なのいかそれとさうゝるアノおつ母ぐ清雅さんにはまこと
おつ母さのはなし私きの心持ハ彩〳〵気で居ると後をお
ゝぐ〳〵なのい程ハ〳〵〳〵〳〵〳〵ゝて居そ出る「ヲヤ」
ふ云のさと「アレサ私ぐ心でなつて居るとサ「ヲおさ
そまとうてもお前の如てるせ恋て居るゝ情人ゝ
るゝまなのいのぐうそ乃狂う私みやア知まなのい

ゝ〳〵〳〵〳〵ゝとるゝ出来るのでハるのいう私く「ナニサそのの
入組ぐ私の心の中へお前みもまさまなのいゝ〳〵知まま
いぐ子供私ぐ清雅さんにん危惧て居てゝゝ嬉ふの
ゝゝ加俳とつけるのといふ気で面白ゝと仕るのでハ
るのい今〳〵を抓ゝけぐあつく気分ゝんで居ると〳〵
てお呉ゝ「アレサそれいてア方程もいふぐ子モシ清
雅さんぐ私の云のをせてまぐやアお花さんにるいく


小秋寒夫を
お若は
異見の場

たいめ
高〻らかいめでもあるが今まで世話をしてくれる旦那の
方のあげ切みくいといふ程なるものでもあるが左程いふ者で
あるまいべもうおもりろくまいろうゆふ位とおもうろう
何程おもろうゆくおあげが清姫さんに惚ておるをけまべ
立ろう止ふらあとろそ仕旦けまどもたれこも腹
まくゆ花ろまと清姫さんざくくそるをざとろうあさら
めやうが世話ふるる引ろうべ何程でもあるものざ

とおいぐらう〜男一おれさんお和あ今までいわれ
れんなんくなろろ〜やアろいろ私ア皆も男ら〜いめぶ
左とふ美ゆも知ろるいがわくトいわまそお花ふ行ゆろ
涙を流〜てさ〜傍きーが墨紙にく泪と拭い拭〜
さろにそ墨に力を入く〜花ろんおお和さんもたれおを
ひぐろう他人でふ程さろ子へそまが傑よ拭
〜いい家を中ふ品まで 了安ての男と夜駕と同じ

[illegible]
けるとゞ女房にする約束とゝ情人もあるい庵ふ
るとさるゞ乳をかゝえて身仕ふるゝるのゞモウく
私ハ悔〳〵つてゝるゝるヨトまさも海よ伏沈むあ
[illegible]節彩揚げぎにゝゝゝ〜ら雛金のゆ表とゝつまる
辺ゝめて表壁沐百合をまゞが妙まの海面程
「コレハ不ハ先帝のみさゞたゆゝうゝ〜表るれ

墨樹のあのゝゝ雅情のゝとゝ云ゞゞ屏
陽ゝゝむあまりにやうまゝ表ゝに浮ゝる
そるゝこの音の徒ゝよゝて空の色ゝ婚ゝ三ゝ
小田稲ゝ表仕ゝゝ寄ゝゝゝゝ一本のゝ
にゝゝ役屋ゝゝゝゝ

「その初恋ハ去年の秋大内山の月ゝ宮ゝ
かゝに姫ゝゝゝゝ

より酒を呑に参ると仰しゃるのかどうぞ何と云へば
そのゝ方がそこらへ行ぐらいとろうとろうとね
美事を呑ようとさまをいつこと意とゞれても
ちかいと立て見れたちろうに
ひかへてとゝなる世をもらうぬいよ
に事と外のまちた
ト言るを呑とる延ばが
ヲヤ〳〵個な御花さんの為に

あるる程の清為程を言るどやアるいう和人お茶もるんど
拙云と申〳〵をお立のえまゝ
花程清行花しても
ちろかりとして能更
アレサアアどまちろてちゆヨ洗に
丈まるが能事どやアるいう
アヽ子へ花程ほやアノ弟
ぐゝあらまゝ言ると私の富本ぐのお茶の清えの清
うりごのゝ間にぐ子へト早下する二女の更ゆ一云
都て云を毛藝するべ
それは花と清能さんに

まさこをこゝへ伺といふそふ様へ
て来てお呉れ　「こんとこは」「アノウ伺の幸ッ子様
と伺をゆきと様が伺あも湯ヒこをけもるみこべ伺の様へ
こをこゝ来たるといふん紙もるいが兵ふ紙で男を呉て
居るのごろこゝ孫ごそのの月日さへるこべ私の方から
命をうけても伺幸清雅さんふた私るりこい孫ごを
りこて居まゝこと接拶をしてお呉ナ　「ヲキ三ハ上ノ十七

そこいさこいそふがま　万一清雅さんが来くれどこて
お茶の方に伺ゆこりをこるこるこゝそれとかこ
ゆる孫ごをこるんでとこて湯て垂のでいるいこと
雅ッここと嬉しいこゝ孫ごこの孫の湯ること
情人ゆいるこべふ来るでも色でも清雅さんの情を次
第毎日接ぶこまこゝ居てお世ふた私ヒこべこる
ごこもせべ命ふのんが伺へこりも仕るのいかこ

方ゞ安堵して他郷を往返るでゐるいえ〳〵
花も名ふだゝ花さると清新さんい色も角も
私ゞおとゝ〳〵幸坊をさるてゞ出来るいめヲ〳〵
ヲヤ〳〵果まこと悦ぶ行人ヲあ〳〵悩らい

遊仙奇遇錦の里巻之七了

赤柏平